

バラとの暮らししかた



私たちの暮らしのスタイル
が目まぐるしく変化して
いくのに合わせて、バラ
も毎年のように新しい品
種が作出されています。
今回は、京成バラ園2018
年秋の新品種を含めて、
バラの“今”と“これから”に
ついて、村上敏さんにたっ
ぷりとお話を伺いました。

(バラ:恋結び(2017年秋、作出:京成バラ園芸))



むらかみ さとし
話 / 村上 敏さん

京成バラ園 ヘッドガーデナー。
豊富なバラの知識・経験を有す
る一方、植物全般への深い造詣
をもとにバラと草花の混植による
ガーデンデザインなどを日々研究し
続けている。TVや雑誌、バラの
講演会などでもおなじみ。

取材・文 / 編集部
協力 / 京成バラ園
写真 / 編集部、京成バラ園芸株式会社*



『ベルサイユのばら』シリーズ
が植栽された「ベルばらのテラ
ス」。等身大のパネルと、バ
ラ園を背景に記念写真が撮
れ、バラ以外の新しい来園
者が期待できます



2018年5月の京成ローズガーデン。最新品種からオールドローズまで約10,000株が咲き誇ります

園芸と暮らしが離れてしまった今
バラの果たす役割とは？

今から50年くらい前までは、ちょっとしたお供えの花やプレゼント用の切花は庭や畑からとってくるくらい、花は生活に密着した存在でした。庭のない下町でも、花の文化は根付いていました。でも都会のライフスタイルの変化によって植物に触れる機会が減り、今では祖父母の世代でも「何も植物を育てたことがない」という方は多いようです。これは海外でも決して例外でなく、趣味の多様化に伴って園芸を嗜む方がどんどん減っており、総じて園芸の「基礎体力」が落ちてきている気がしますね。

バラを育てる方が減った……そんな中で、京成バラ園の立ち位置も少しずつ変わってきたかな？と感じています。元々はバラ苗を売る「見本園」としての役割が大きかったのですが、最近は「バラを見に行こう」という目的で訪れる方がドンと増えました。もちろん、園内の姿をしつかり見極めた上で苗を買われる方も依然として多くいらつしやいますが、やはり花を見て楽しむための「観光スポット」としての役割は大きくなりましたね。これを受けて私たちが、今年は「恋」をテーマにしたバラを展開したり、全天候型の写真映えするスポットを設けたりと色々工夫してみました。そのおかげか、若い方の来園が大分増えてきたように感じます。



右／「恋人の聖地」でもある京成バラ園。温室内に恋人たちが楽しめるコンテンツが！
中／秋の新品種お披露目となった『ローズ・トライアル2018』（業者様向け）
左／“恋”をテーマに掲げた今年のバラの総選挙。例年よりも若手の方が多く参加されていました